

# 食料問題を見直す指標

## マイルージ

### フード・マイルージの登場

現在の社会でマイルージという言葉から大半の人々が連想するのは、搭乗距離に比例して付与される航空会社の特典である。マイルージ・プログラムとかマイルージ・サービスを簡略にした言葉で、複数の航空会社が競合する路線では、人々が搭乗する会社を選択するときの判断基準になるほどの効果がある。これは航空会社の選択に影響する程度であるが、現在の社会の構造を根本から見直す契機となるマイルージが存在する。

まずフード・マイルージである。これは食品を生産地点から消費地点まで輸送するのに必要なエネルギーの数値で、一九九〇年代にイギリスの市民運動からフード・マイルズと

いう名称で登場した。目的は食品輸送で発生するエネルギー消費や温室効果ガス排出を社会に周知し、地球環境問題や食料安全保障への関心を向上させることであつた。日本では二〇〇〇年代に、この運動を参考にフード・マイルージとして広報された。

### 世界有数のフード・マイルージ国家

日本の現在の食料自給比率は熱量基準で三八%、主食となる穀物では二八%である。それ以外は海外から輸入していることになるが、食料ごとは主食のコメこそ九九%でほぼ自給できているものの、小麦は一七%、大豆は二六%、果実は三〇%であるし、かつては漁業大国として輸出までしていた魚介も現在では自給比率五三%である。東京の豊洲

市場を早朝に見学すると、外国から空輸されてきた氷詰めの魚介が氾濫している。

これは食料安全保障の観点から日本の弱点であるのは当然であるが、環境問題の視点からも重要な課題である。一例として、アスパラガスは年間二万五〇〇〇トンほどが国内で生産されているが、外国から一万吨を輸入している。その八〇%はメキシコ産品である。タマネギは国産が一〇〇万トンで、輸入は大半が中国からであるが二〇万トンになる。ピーマンは国産が一二万トン、輸入が四万トンで、八〇%が韓国から輸送されてくる。

そこでフード・マイルージを計算してみると、アスパラガスは国産の一四%が北海道産であり、東京まで輸送しても一〇〇〇キロメートル程度である。最大の輸入相手のメキシ

コから日本までの距離は一万キロメートルであるから、単純な計算でも一〇倍の輸送エネルギーを必要とする。さまざまな食品の国産と輸入とのフード・マイルージを比較すると、牛肉は二・四倍、タコは四・八倍、豆腐は四・五倍、カボチャは九・二倍となる。

さらに食料全体のフード・マイルージを国別に計算すると、日本を一〇〇として、韓国は三五、アメリカは三三、イギリスは二一、フランスは一二であり、日本は突出している。昨年一二月にモントリオールで開催された生物多様性についての国際会議（COP15）で、自然環境の保全と共に食料廃棄の半減や過剰消費の削減が目標とされたように、大量のエネルギーを消費して世界から食料を輸入する仕組みは批判の対象となる時代である。

念が誕生した。日本は国土面積の七〇%弱が森林という世界有数の森林大国であるが、一九六〇年代に木材の輸入規制が解除された結果、安価な海外の木材が大量に輸入され、前世紀末には自給比率が二〇%弱まで低下した。現在は多少回復しているが、それでも四〇%強であり、依然として約六〇%は北欧、北米、シベリアなど世界各地から輸入している。国産の木材より安価という理由であるが、このような経済本位の活動のために日本の林業は衰退し、一九六〇年には四万人であつた林業就業者数は最近では四万人強まで減少し、二酸化炭素を吸収する森林の役割を減少させている。それらを日本まで海路や鉄道で輸送してくるウッド・マイルージを計算すると、国内で調達した場合と比較して、北欧からは一四倍、北米からは七倍、シベリアからも七倍という結果になる。

### ウッド・マイルージも世界有数

フード・マイルージに影響され、日本でウッド・マイルージという概

### マイルージから資源を見直す

消費する立場では、安心できる食

品を安価に入手できるということが主要な評価基準であつた。それに対応するため、供給する立場では海外から輸入するということが有力な手段であり、日本は世界から食料を大量に輸入し、需要には対応するものの足元の産業を破壊してきたのが実態である。しかし、世界の人口が急増し、さまざまな資源が枯渇する事態が発生するようになり、単純に需要に対応するだけの構造は破綻し始めてきた。

昨年出版された『世界で最初に飢えるのは日本』（講談社+α新書）が話題になっている。世界規模の食料生産の減少や物流の停止が発生すれば、日本は世界で最初に飢餓が発生する国家になるという警告である。その根拠がフード・マイルージである。これまで価格を唯一の判断基準として食料政策を推進してきたが、地球が養育できる規模を超過して人口が増大しつつある現在、フード・マイルージの視点から食料を見直す時機である。

東京大学名誉教授  
つきお よしお  
月尾嘉男



昭和一七（一九四二）年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究する。ともに、全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組む。